博士学位論文審査要旨

２０１４年7月１８日

論 文 題 目：　明治後期における紀行文の「進歩」とジャンルの自立性
—小島烏水の理論と実践を中心に—

学位申請者：熊谷昭宏

審 査 委 員：

主　査：文学研究科　教授　田中励儀

副　査：文学研究科　教授　山田和人

副　査：文　学　部　教授　西川貴子

要　　旨：

本論文は、明治後期に〈紀行文流行の時代〉があったにもかかわらず、今日の〈近代文学史〉や〈明治文学史〉で閑却されている、紀行文の実態と背景を明らかにしたものである。日本文学は小説を中心に展開し、紀行文は下位のジャンルに位置づけられることが多かった。その中で、紀行文の独立した価値を唱えた小島烏水の紀行文と紀行文論に着目し、紀行文というジャンルの自立性を近接する小説との関係から考察したところに本論文の意義がある。

第一章では、明治３０年代前半における小島烏水の言説を取り上げ、同時代の地理学言説との共通点を見出すとともに、明治３４年から３５年の間に「歴史」知識の重視から「登山案内」情報の重視へと変化した意味を考察した。第二章では、山岳紀行文を本領とする烏水が明治３６年に発表した「鎗ケ嶽探検記」に的を絞り、烏水が用いるキーワード「写生」と「その土地特有の景象」との関係を、当時、文芸批評で多用された「地方色」の概念と比較しつつ考察した。

第三章からは分析対象を広げ、まず、江見水蔭の〈実地探検〉を取り上げた。「奇」「危」に象徴される過剰な形容が「事実」性と奇妙に結びつき、その「事実」性において同時代の田山花袋の小説の方法と重なると指摘した。第四章では、紀行文の名手遅塚麗水の文体を取り上げ、時代の流れと逆行するような、口語体から文語体への書き換えなど、〈文体置換の遊戯〉が行われたとした。第五章では、洋画家小林鐘吉の「写生紀行」に着目し、画と文の関係や「地方色」の収集の問題を論じた。第六章では、田山花袋が著したふたつの月ヶ瀬紀行を取り上げ、その変化を紀行文が「人生」を描く小説に従属していく過程と位置づけた。

そして、第七章で小島烏水に戻り、明治４０年頃の紀行文論の揺れと『日本アルプス』第１巻収録諸編との関係を考察した。エマーソンの思想に着想を得た「自然」と人間の融合の表現から、ラスキンの理論を用いた「自然」観察の表現への変化を跡付けた。

本論文は、研究対象とされることが少ない明治期の紀行文を取り上げ、具体的な資料に基づいて実証的な分析を行い、多くの新しい知見を提出した。個別具体的な研究を総体としてまとめ直し新たな「文学史」を構築する課題は残るが、着実な研究姿勢は評価できる。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１４年7月１８日

論 文 題 目：　明治後期における紀行文の「進歩」とジャンルの自立性
—小島烏水の理論と実践を中心に—
学位申請者：熊谷昭宏
審 査 委 員：
　主　査：文学研究科　教授　田中励儀
　副　査：文学研究科　教授　山田和人
　副　査：文　学　部　教授　西川貴子

要　　旨：

上記審査委員３名は、２０１４年7月１５日、午後７時から約２時間にわたり、徳照館会議室において、公開で学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、審査員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答をおこなった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学術水準の高さが確認された。

また、語学（英語およびフランス語）についても、十分な理解力と運用能力、および表現力があることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格と認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：明治後期における紀行文の「進歩」とジャンルの自立性―小島烏水の理論と実践を中心に―

氏　　名：　熊谷　昭宏

要　　旨：

高須梅溪（芳次郎）「明治の美文と紀行文」（『日本文学講座』第12巻、1934年4月、改造社）では、明治後期に、近世以来の古い紀行文が「進歩」の過程で「科学」性と「主観性」を獲得したと述べられている。また、明治後期に紀行文流行の時代があったことが、先行研究などから明らかになっている。しかし、「近代文学史」や「明治文学史」の類では、近代（明治）の紀行文についてほとんど語られていないこともまた、事実である。

梅溪の整理と先行研究の成果を踏まえ、以下のような問いを立てた。紀行文の変化の実態と背景はいかなるものだったのか。紀行文はなぜ後の「文学史」で閑却されたのか。本論文では、小説中心の「文学史」が隠蔽した、紀行文流行の内実を明らかにすることを目指した。同時に、紀行文というジャンルの自立性を、近接する小説との関係から考察した。これは小説が他のジャンルといかなる関係をとり結んでいたかを考える上でも有効であると考える。主な分析対象は明治後期の主要な紀行文家の一人、小島烏水の紀行文と紀行文論である。また同時代の紀行文をめぐる状況を把握し、かつ烏水を相対化するために、他の紀行文家たちの紀行文などにも適宜言及した。

第一章では、小島烏水の初期（明治30年代前半）の紀行文と紀行文論の変化を考察した。

第一節では、同時代紀行文家に対する烏水の批判を分析した。そこから、紀行文では「歴史」の〈正しい〉知識に基づいて土地が語られなければならない、という主張を確認した。第二節では、烏水の論と同時代の地理学言説との共通点を見出し、烏水が紀行文に求めた「歴史」知識が、同時代の紀行文「作法」書類と比べて極めて厳密なものであったことを指摘した。第三節では、明治34年8月刊行の『銀河』（内外出版協会）収録作品を分析し、そこには先行研究で指摘される「科学」的知識は実は少なく、「歴史」の想像が強調されていることを指摘した。第四節では、烏水が編集する雑誌「文庫」（内外出版協会）における新企画の内容を分析し、烏水の紀行文論が明治34年から35年の間に大きく変化したことを確認した。そしてその変化が、「歴史」知識の重視から「登山案内」情報の重視へ、というものであると意味づけた。第五節では、明治39年7月刊行の『山水無盡蔵』（隆文館）収録の際大幅に加筆訂正された「浅間山の煙」（「文庫」13-6、1900年1月）の本文異同を分析し、前節で意味づけた変化が実際の紀行文に反映されたことを指摘した。さらにこの時期、烏水の紀行文において、現在の土地に関する〈正しい〉知識と旅する主体の経験とが結びついたことも指摘した。

第二章では、烏水が明治36年に発表した「鎗ヶ嶽探険記」（「文庫」22-2～24-6、1903年1月～12月）と紀行文論「紀行文に就きて」（「文庫」23-6・24-2、1903年8月・9月）の分析から、明治30年代後半に整備された烏水の紀行文論と、さらに厳密になった〈正しい〉知識の問題を考察した。

第一節では、「鎗ヶ嶽探険記」本文の改訂を分析し、紀行文で語られる植物等に関する知識の〈正しさ〉が極めて厳密なものであったことを明らかにした。第二節では、烏水の用いるキーワードである「写生」と「その土地特有の景象」との関係を、明治30年代後半から文芸批評で多用された「地方色」の概念と比較しつつ考察した。そこから、烏水が「案内」の目的を超えた土地の特色を語ろうとしていたことを指摘した。第三節では、同時代の烏水批判を分析し、科学的

知識を語る紀行文が文壇では十分な評価を得られなかったという状況を確認した。第四節では、「鎗ヶ嶽探険記」が山岳の博物誌としての性格を有することを指摘した。また、烏水の試みが、〈正しい〉知識に基づく紀行文を同時代「文芸」の中心に位置づけようとするものであった、という意味づけを行った。

第三章では、明治 30 年代前半発表の江見水蔭による探検記数篇と、それらを収録した「実地探検」という言葉を冠した明治 40 年刊行の単行本に注目し、紀行文における「事実」性の問題を考察した。

第一節では、水蔭の「実地探検」の表現が「奇」「危」に象徴される、過剰な形容の表現に満ちており、それが少年読者から支持されていたことを確認した。第二節では、単行本の序文等で強調された「実地探検」の「事実」性が嘲笑にも似た批判にさらされたという状況を、「事実」理解の相違によるものであることを指摘した。第三節では、一見全く異なる水蔭の「実地探検」と同時代の田山花袋の小説が、どちらも語り手の「観察」の態度が支える「事実」性に依存していることを指摘した。また、そのような「事実」性への志向が、烏水の紀行文論の背景にもあることを指摘した。

第四章では、明治 20 年代後半から紀行文の名手と評価されていた遅塚麗水の紀行文を取り上げ、烏水の主張する〈正しさ〉の相対化を試みた。

第一節では、ほぼ同一のエピソードを素材とした明治 30 年代末の麗水の複数の紀行文を比較し、語られる内容の取捨選択以外に、文体の使い分けが行われていることを明らかにした。第二節では、明治 40 年前後の言文一致をめぐる議論の中で、紀行文もまた言文一致化の方向に向かいつつあったことを確認した。そのうえで、口語体の紀行文を文語体へと書き換えるかのような麗水の方法の特殊性を指摘した。第三節では、同時代の書簡文「作法」書で、文体を自在に書き換えたり書き分けたりする技術が説かれていることに注目し、麗水の書き分けや書き換えを文体置換の遊戯として理解すべきであることを示した。また、麗水の方法と比較すると、〈正しい〉一つの紀行文に向かうことを目指す烏水の立場の特殊性を再確認できることも指摘した。

第五章では、明治 30 年代半ばから洋画家として活躍した小林鍾吉の紀行文に注目し、同時代の風景画と紀行文との関係を考察した。

第一節では、明治 30 年代から 40 年代の画家たちが盛んに「写生旅行」を行い、「写生旅行」のエピソードを語る「写生紀行」が多く発表された状況を概括した。そして小林の「写生紀行」が単なる挿絵の解説ではなく、作画中以外のエピソードが豊富に語られていることを確認した。第二節では、「写生紀行」が、風景を「写生」する旅という行為全体を語るものであり、その語りが、実地で作画するという風景「写生」のモラル遵守につながることを指摘した。またこの時期、風景画が「写生旅行」の語りと不可分のものとして受容されていた可能性も併せて指摘した。第三節では、小林の「写生紀行」の背景に、「地方色」の収集が企図されていたことを明らかにした。そのうえで、旅の主体による「地方色」の発見が、同時代の紀行文に期待された重要な条件の一つであったと結論づけた。

第六章では、明治 30 年代に田山花袋の紀行文がどのように変化したかを明らかにした。またその変化を、小説と紀行文との関係の問題に接続した。

第一節では、数篇の紀行文を比較し、花袋の紀行文の変化が、「地方」の「人生」に対する関心の高まりに伴って起きたということを指摘した。第二節では、明治 30 年代半ば以降、花袋の紀行文において「地方」の「人生」の物語が重要な要素となっていくことを指摘した。第三節では、そのような物語が花袋の小説論のキーワードの一つである「地方色」と深く関係していることを指摘した。第四節では、第三節までの考察を踏まえ、明治 30 年代後半に起きた花袋の紀行文の変化は、紀行文が「人生」を描く小説に従属し、下位ジャンル化する過程であったと結論づけた。

第七章では、明治 40 年頃の烏水の紀行文論の揺れと、『日本アルプス』第 1 巻（1910 年 7 月、

前川文栄閣）収録諸篇との関係を考察した。

第一節では、明治40年以後、烏水が紀行文と小説との差異や紀行文のジャンルとしての自立性を問題化した過程を整理し、「自然」と人間との関係をいかに語るかということが最重要課題とみなされたことを確認した。第二節では、前節で確認した課題に取り組む中で、烏水の紀行文では、エマーソンの思想に着想を得た「自然」と人間との融合の表現から、ラスキンの理論を用いた「自然」観察の表現へと変化したことを指摘した。第三節では、吉江孤雁らの同時代評を参照し、『日本アルプス』第1巻収録の紀行文がどのように読まれたかを確認した。第四節では、小説との差異化を狙って用いられた、身体として見出される「自然」の表現が、しばしば見たままの風景描写から離れ、読者の想像を困難にする奇妙な紀行文を生むに至ったと結論づけた。

明治30年代前半から40年代にかけての烏水の紀行文の変化の一部は、「科学」性に向かったという点で、まさに梅渓の明治紀行文学史そのものであったと言える。しかし、初期の強い「歴史」志向や、『日本アルプス』第1巻における特殊で読者を困惑させる「自然」観察は、小説に向かうジャンルと見なされた紀行文を閑却する、一般の文学史からは見出せない問題である。烏水をはじめとした明治期の紀行文に注目することは、文学と描写の〈正しさ〉、小説が他ジャンルに与えた影響をはじめとして、種々の問題を新たな視点から捉え直すための契機となることを、本論文で示した。